

研究報告  
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡  
—池田敬子 選手—

依 田 充 代 (スポーツ社会学研究室)  
清 宮 孝 文 (スポーツ社会学研究室)

本稿は、「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは平成28年9月2日(金)に池田敬子氏にお話を伺った。

【経歴】

- 1953年3月 広島県立三原高等学校卒業
- 1953年4月 日本体育大学体育学部体育学科入学
- 1956年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
- 1956年4月 日本体育大学体育学部助手
- 1966年4月 日本体育大学体育学部助教授
- 1995年4月 日本体育大学体育学部教授
- 2004年4月 日本体育大学名誉教授

【競技歴】

- 1954年 世界体操競技選手権ローマ大会 平均台優勝
- 1956年 オリンピックメルボルン大会 団体6位
- 1958年 世界体操競技選手権モスクワ大会 団体6位
- 1960年 オリンピックローマ大会 個人総合5位
- 1962年 世界体操競技選手権プラハ大会 平均台3位
- 1964年 オリンピック東京大会 団体3位
- 1966年 世界体操競技選手権ドルトムント大会 個人総合3位, 平行棒2位

1. 競技との出会い

1933年11月11日、広島県三原市の佐木島で生を受けた池田敬子氏は1950年、広島県立三原高等学校に入学し、ソフトボール、バレーボール、テニス、陸上と様々な競技を行う中で器械体操と出会った。

器械体操を初めて見たのは、高校で開かれた模範演技会であった。当時のことを池田氏は次のよ

うに話してくれた。「最初に段違い平行棒とか鉄棒とかの器具が出てきて、何をやるものなのかわからず『これはなんですか?』って聞いたら、『うん?それ?器械体操』って言われて、運動会の合間にそれがドーンと出てきて、模範演技会がはじまった。『うわー、サーカスみたいなことやってる、あの上に上りたいなあ』って思って、それが目標になったの」。

池田氏は小学校4年生から習っていたバレエの

基礎があったため、器械体操の床運動も振付を自身で考えて作り上げることができた。教科書もない、コーチも先生もない中で自分が考えてできるスポーツ、器械体操が一番自分に合っていると夢中になった。「こういうのやろうかなって、平均台の上であの10cmの幅で前転をやったら、『おまえそれはサーカスがやっているからダメ』だって、先輩に怒られたりした。それじゃとバランスとってかっこよくやったら、『それはダンスだからダメ』だとか『体操じゃない』とか、それでも自分のやりたいことを通して器械体操をやってきた」という。こうした経験が選手時代も指導者になった時にも役に立ち、体操競技の振付や、ピアノ曲の構成にも活かされた。

高校時代は器械体操をやっている先輩たちを見ながら、いろいろな技を試した。ある時は、器械体操で日本一になった岡山の県立邑久高等学校まで、どんな練習を行っているのか見学に行ったという。当時、その高校には有名な器械体操の選手がおり、体操競技を何も知らなかった池田氏はその選手たちの技を見て真似て覚えた。まさに、好奇心の塊だった。また、三原高校では男子の先輩たちの演技を真似て練習を行っていたので、それが後に世界で通用する技につながったという。

佐木島から三原高校には船で通学した。45分の船上では必死になって宿題を終わらせるために集中して勉強し、時間があると体操の練習も行った。その船の船長さんが既に100歳になっているが、今もお元気で当時の思い出話をしてくれるそうだ。

当時の様子を池田氏は次のように語っている。「高校時代はどんなに練習したくても17時には船に乗らないと家に帰れない。1日がすごく早くて、ぎゅっと詰まっている感じで、遊んでいる暇なんてなかった。家に帰ってご飯を食べたらバタンキューで寝ていたし、目が覚めたらもう船に乗って、船で出来ることはなんでもやった。ある日、英語の宿題があって、今日は絶対にあたるなと思ったから、10行くらいを念仏のように唱えて

暗記した。そしたら先生が『うーん、船でよく覚えてきたね』ってほめてくれて、船は私が唯一いろいろ考える場所であったし、補強運動をする場所でもあった。船の上で狭いふちの上を歩いたり、高いところに登ったり、だから平均台なんて怖くなかった。船は動いているけれど、平均台は動かないから、自然にそういうふうに鍛えられたから、ただ平均台の種目をこなすっていうだけじゃなくて、ぶら下がったり、よじ登ったり、細いところ歩いたりする、遊びとしての要素が面白かった」。

マット運動のでんぐり返しは、子どもにとってものすごく楽しいものだと言っている池田氏はいう。マット運動では回転したときに首を中に入れてコロッと転がる動作を学び、転んだ時に手が出る動作は、走って行って踏切版を踏んだら必ず手を出すという基本の動作である。こうした動作を習っておけば、ケガをすることもなく、いざという時のいろいろな動作や生活に必要な動作が器械体操の中にある、それをフルに使えるのが楽しかったそうだ。

高校3年生の秋に広島で国民体育大会があり、そこに日本体育大学の竹本先生が来られているのを聞き、日体大出身の中島先生と一緒に会いに行った。中島先生が竹本先生に「日体大へ行かそうと思うんですが」と言ったら、竹本先生が「ああ、そうか。来るんだったら来たら？」と答えて、池田氏の日体大行きが決まった。東京の大学に行くことに対して、祖母は少し心配していたが、母は「やりたいことをやればいいんだよ」と送り出してくれた。池田氏は「やりたいことやってくる、器械体操でオリンピックに行くまで帰って来ない」と宣言して故郷を後にした。

## 2. 日体大の思い出（当時のオリンピック前後のお話し）

上京するために安芸号（寝台）に乗車して18時間かけて東京に向かった。途中、大船駅でみんなから「電車から大仏を見て行きんさい」と言われていた池田氏は、今でも大仏を見るとその時

のことを思い出すという。

大学時代は外寮に居住していた。間取りは1階が食堂で2階がかなり広い畳の部屋があり、そこを1年生が2人と、区切って上級生が3人くらいで使用していた。その食堂にはよく山下清が来ていて、サバのみそ煮でご飯を3杯食べていたのを思い出すという。当時のことを池田氏は「『清ちゃん、そんなに食べるから太るんだよ』って言うと、『うん、でもおいしいんだな、これは』って。日体大に入っただいぶ経ってから、実演会で尾道の千光寺に行ったとき、清ちゃんが来て、『清ちゃん何してんの、こんな尾道のほうまで来て』って言った『うん、しーっ、黙っとしてお母さんには』ってサインをくれた。長谷川町子さんも、毎朝トレーニングしていると『おはよう、頑張っ』って、春日八郎さんも『敬子ちゃんお茶のみにおいで』って声をかけてくれた。桜新町全体が親戚みたいで、厳しくて貧しかったけれど、みんなが私たち学生を応援してくれて、だから楽しかった。楽しい思い出になっている」と語ってくれた。

池田氏が大学に入学したのは昭和28年の4月で、日本体育大学の設立が認可され、大学としての一歩を踏み出したわずか4年後のことだった。

当時、戦争が終わっても中庭には男子の寮が焼けずに残っており、当時の学長である栗本先生が文部省（現：文部科学省）のスポーツ局長であり、戦後に焼け出された文部省の家族の人たちも寮に入れて、助け合いながら生活をしていた。

入学当時の様子で初めての世界選手権出場について、池田氏は次のように話してくれた。「入学して大学生活が始まったけれど、こんなボロ学校でどうするのかとっていて、理事長が来て偉そうにするから、『理事長、まず、日体大にどうやったら生徒が来るのか考えて欲しい』って言った、『お前らが考えなさい』って言うんだよ、だから『じゃ、金メダル取れば来るよ』って言った、『簡単に金メダルっていうかね』って言われて『じゃ、次のローマの世界選手権で金メダル取れ

ばいい』って言った、『おまえ、予選を通過しないと行けないんだよ』って言われて予選会で頑張った。そして、予選会で結果を出してたった2名の女子枠を取ったのに、体操協会が『女子は海のものとも山のものともわからないから連れて行かない』って言うから途方にくれたよ。でもそのローマの世界選手権の団長が後藤百太郎っていう名古屋の大物でね、女子の参加を後押ししてくれたんだよ。そして、初めての世界選手権参加で初めての金メダルを獲得して、人生って自分で作るっていうけれど、本当に不思議だったよ。私はね、小さい頃からわんぱくしてたから、それが器械体操のメダルに結びついたと思っている。だから、小さい頃はわんぱくさせて、前頭葉をしっかり使って汗をかくことを行っていけば、大人になった時の力になると思うのよ」。

池田氏は大学3年生19歳の時にローマの世界選手権平均台で優勝し、その後はヨーロッパをまわり卒業した年には日体大の助手としてメルボルンでオリンピック初出場を果たした。ゆか4位、個人総合13位、団体6位の成績は納得できるものではなく、審判の判定に悔しい思いをした。しかし、このメルボルンオリンピックでは、体操競技だけではなくレスリング協会や陸上の円盤投げの選手・役員たちと一緒に生活するという経験からいろいろな練習方法を学んだという。当時、ヘルシンキオリンピックで優勝したザトベック選手が「走る機関車」と言われていて、彼の練習を見に行くと、準備運動がバレエのレッスンのようで、とても柔らかい身体をしていることに感銘を受けた。日本の陸上界も「もっと勉強しろよ」と言いたくなるようなウォーミングアップで、印象的だったという。池田氏はメルボルンオリンピックでは貪欲にいろいろな選手を見に行き、選手としてまた指導者としての眼を養った。

器械体操の試合は本来ソビエトが優勝すると思われていたが、ハンガリーの動乱事件があり審査員の同情得点上がりハンガリーが優勝した。しかし、結局オリンピックが終わる時には、ハンガ

リーの選手団は全員亡命して閉会式には一人も残らなかった。

そして、4年後がローマオリンピック大会(1960年)で、昔の建物と新しい建物を融合させて行った素晴らしいオリンピックだった。体操競技は体育館ではなく、カラカラ浴場で行われ、演技を行っているとぼろぼろと石が上から落ちて来たが、誰も文句を言う人はいなかったと池田氏は話してくれた。また、歴史と共に新しいことを重ねて歩んでいるのが、イタリアであり、「オリンピックを開催するためにすごい建物なんか建設しないで、プレハブでいいから終わったらパタパタと閉めて本当に何もなかったように終わらせるのもいいと思うのよ」とも池田氏は言う。

ローマオリンピックでは個人総合6位、段違い平行棒と平均台5位、団体4位の成績を収めた。

池田氏は1958年に結婚し、このローマの翌年1961年に長男を出産した。その後、わずか4ヵ月後に行われた全日本体操選手権大会では見事に5連覇を果たし、1962年に行われたプラハの世界選手権では平均台で銅メダルを獲得した。その後1963年には次男を出産、東京オリンピックを控えた中での出産は非難されたが、妊娠7か月までは練習に励み、出産後わずか1週間で練習に戻って、東京オリンピックを目指した。

出産のエピソードについて池田氏はこう語った。「関東労災病院の医院長が『おまえ子ども産むんだろ、どこで産むんだ?』って聞くから『近いところがあったらいいんですけどね』って言ったら、『よっしゃ、おまえのために関東労災病院は産婦人科を作る』』と言ってくれたの。子どもは二人とも予定日に出産したけど、長男は関東労災病院の新生児1号なのよ」。周りの人たちが協力したくなる、応援したくなる、池田氏の人柄がよくわかる話である。

### 3. 東京オリンピックでのメダル獲得

池田氏は東京オリンピックに対して選手の成績

以上に「日本国をどう世界に見せつけるか」だと思っていたという。もちろん、勝たなきゃいけないとも思っていたけれど、大学からわずか30分の代々木にオリンピック選手村ができ、世界中から選手たちがそこに来ることが嬉しかったと当時を振り返った。

新幹線もオリンピックに合わせて完成し、開通は10月1日であった。初日に名古屋での合宿のために乗車するはずだったが、体操協会が選手全員の安全を考えて、初日の乗車を見合わせたため、翌日が初乗車となった。

東京オリンピックはメダル獲得のプレッシャーよりも、とにかくソビエトに勝つこと、敵はソビエトだったという。

東京オリンピック女子団体に出場したメンバーの中で日体大出身は、池田氏と虻川吟子(千葉吟子)氏、相原俊子氏の3名だった。女子代表の目的は表彰台に上がることも、男子と肩を並べる事だった。男子の足を引っ張りたくなかった。

東京オリンピックは地元開催のため、日本人選手にはゆとりもあったが、やりづらさもあったようだ。親戚や知り合いや教え子やみんなが応援に来てくれるのは嬉しかったが、やはり誰もいない外国での大会の方が精神的には楽で、東京オリンピックの時にはそれを乗り越えることが重要だったという。

オリンピックがはじまり、野球の王さんや長嶋さんなどみんなが見に来てくれて応援してくれた。試合開始の3日くらい前には、巨人軍が体操の選手に声かけてくれて、赤坂の料亭でごちそうになり、池田氏は「美味しかった、頑張らなきゃ」って思ったことを今でも鮮明に覚えていると語ってくれた。

東京オリンピックの時は長男の誕生日である7月15日だけは、ケーキを持って帰ってハッピーバースデーを歌ってあげたが、泊まることもできずにすぐに選手村に戻らなければならなかった。「子どもたちは私と一緒に戦っているのと同様だった」と池田氏は当時を振り返る。「中学生に



なって、元オリンピック選手のお母さんと一緒にテレビに出て下さいって依頼がいくつも来たけれど、息子は『いや、僕の世界はお母さんの世界とは違いますから出ません』ときっぱりと断って、それ以来一切親子でテレビに出たことはない」と少し誇らしげに語ってくれた。

東京オリンピックでは初日の平均台でチーム最高得点の97.0を獲得し、統一ドイツ（西ドイツと東ドイツ合同）に勝利して、女子団体銅メダルを獲得した。

#### 4. その後の人生

東京オリンピックが終わり、その後1966年がドルトムント（ドイツ）世界選手権だった。東京オリンピックでは個人でソビエトの選手に負けたため、この大会では絶対に勝つと執念を燃やしており、見事に個人総合3位、平行棒2位で銀メダルと銅メダルを獲得した。

池田氏は当時の様子を次のように語ってくれた。「東京オリンピックで私が負けた選手がこの大会では個人総合12位だったから、そこでけじめがついた気がした。東京オリンピックで負けたのが悔しくて、悔しくて、寝るのも惜しくて、私が寝るときに敵が起きて練習しているのかと思ったら、ゆっくり眠れなかった。早く起きて練習しようって思って、地球のあっち側で練習している奴らを思って練習ノートをつけていた」。

指導者と選手を両立し、チーム6人分の振付を行い、家庭では二人の子どもの母であり妻であり、まさに「スーパーレディ池田敬子」であった。その陰には、ご主人とお手伝いさん（つるちゃん）の絶大な理解と応援があった。

個人総合3位の成績を収めたドルトムント世界選手権の後、1967年には全日本体操競技選手権大会個人総合で10回目の優勝を果たし、翌1968年の全日本体操競技選手権大会を最後に池田氏は公式試合に出場することはなかった。

その後の人生について池田氏は「みんな将来は

こうなりたいとか、先の光を見てとかいうけれど、私は目の前に見えることから順番に、今をやらなければ明日は来ないと思っている。今を大事にしたことで、結果的にそれが将来につながりその先の未来で結果を出してきた。みんなが子どもたちに将来、未来って言うけれど、そんな夢みたいなことを言っても子どもたちにはわからないと思う。私がそうだったけれど、今見えることを楽しんで好きにならないと、『ああ、できた、あ、これできなかった』ってできることを探して、できないことをチャレンジして、楽しみながら人生を歩いてきた感じがする。振り返ったら80年経ってそんな感じがする」と語ってくれた。

日本体育大学では、教授、スポーツ局長、副学長を努め2003年に退職し名誉教授となったが、その前年の2002年には、日本体操女子で初めての国際体操殿堂入りを果たしている。

70歳で故郷の広島に体操の体育館を建設した。「自分がやってきたことを目に見えるようにするには地元で子どもたちを育てることかなって思って」と、今でもひと月に1回は広島に行き子どもたちに体操を教えているという。過去にその教室から育てていった子どもたちが体操教室に帰ってきて、今は指導者として子どもたちに体操を教えている。

#### 5. 日体大の学生に対して一言

池田氏は母校の後輩たちに次のようなメッセージを送ってくれた。

「人生はリハーサルがない。だから目の前のことを、瞬間、瞬間を大事にしていかななくては、1秒+1秒が成功したら、必ず次の2秒は前進するから、その1秒の間の+を大切に前に進まないといけないと思う。そこをさぼっちゃうとなんとなくやっていたら、やっぱりなかなか成功しないと思うの。

体操競技の技にはロンダードってのがあって、走って行って、切り替えて、前から1/2方向

ねじって後ろに宙返りをするという、この前から後ろへの切り替え動作が上手くいかないとだめ。ドアでいうと蝶番で、この一瞬一瞬がうまくつながらないと、次の試合でやろうとしている4回転ひねりにつながらないの。

やっぱり人生ってそういうものだと思う。この手前の1秒をすごく大切にしないと、やっぱり良くないよって選手たちには言うんだけど。

私はとにかく不自由な時代を駆け抜けた、ただ学校とか環境任せじゃなくて、自分たちで何とかしなきゃいけないから、練習だけじゃなくて、遠征や海外試合の費用を含めて、練習して発表して勝ちたいというその中には、そこまで入っていた。そういう選手時代だったから、本当に大変だったよ。

学生たちが上級生に挨拶とか言われているけれど、そんな当たり前のことができなければ、人間関係はうまくいかないと思う。礼儀とは会話の突破口だから、それがなければ人間関係はうまくいかないし、人間として大切な行動だと思う。

そして、指導者になったら、どう見るかじゃなくてどう支えるかに力を入れて、次の指導者にもそれを伝えて、支え合う空気が必要だよ。自分が支えられなくて、人が支えられるわけがないから、まず自分のことをやらないと。理想ばかり言ったらダメだと思う。まず今、目の前で自分が脱いだ靴はどうなっているかというところから始めてもらいたいな。私が大学の教員の時は、授業に遅れた生徒に対し、全員の靴を履きやすいように並べさせた。

ドアを開けるとしても、開けっ放しにして通れるようにするか、後ろの人がどう通るかという開け方をするか、そこが大事だと思うの。後ろの人が通っていきける開け方をしてやると、後輩たちもそれをそのまた後輩たちに伝えて、100人の後輩たちが通れるようにしてあげられるようになる。一人だけが通るドアの開け方とは違うと思うの、連続して通るのともね。

まあ、それをかっこよく言えば歴史をどうつな

げていくかってことだと思うんだけどね。21世紀を前に向かって歩いていくんだったら、20世紀の歴史をきちんと調べて、そこを土台にしていけないと将来は見えないと思う。

人間は成長するにつれて一人ずつが違う考えになっていくから、行動を起こさせるための教育は大事ななと思う。一つの目的のことを先生が教えているときに、片一方の池田先生は教え方がこうだった。Bという先生は違う、C先生も違う。違うのよ、みんな教え方が、だけれども目的、教えようとする何かの答えは同じなの。2+2=4というのは分かっているけど、4に行くにはどうしたらいいのかって。これを4にするには足し算の2+2で教えるか、掛け算の2×2で教えるか、人によって教え方が違うんだよね。

今の自分にラインが見えるとしたら、そのラインが高すぎても低すぎてもいけない。そのラインは自分で決めるものだから、高すぎて引かかって『ああダメだ』って思うのか、低すぎて簡単にクリアできるようにするのか、成長していくためのラインを自分で見極めて、自分でクリアしていくことが大切なんだと思う。

夢は夢、持っていていいけれど、夢ばかり見ても夢では食べられない。目の前のことをきちんとやっていかないと夢まで到達はしない。目の前の積み重ねが将来につながっていく。目の前のことを自覚してそのラインをクリアしていかなければ、将来の夢はつかめない。

大げさに考えることはない。自分のできることをやっていくことがすごく大事だと思う。無理すると必ずケガをするから。体操でいえばいきなり宙返りじゃなくて、前転からはじまって後転、この頭が1回回転するのを前転で覚えて、その回転を何回もしたら手をつけて前転していくという動作につながるようになるのだから、まずは目の前のことができたらいと思う。

私は今でも毎日逆立ちをするけれど、これを何十年もやってきて逆立ちはバランスだと思ってる。若いときは力がないと逆立ちはできないと思って

いたけれど、年取ってみるとバランスだと分かってくる。

バランスが成長すると自信になる。自分が目の前でやってきたこと、こつこつやってきたことが、自信となって見えてくる。そこが大事。自信がついて道が広がったら、『たー』って行っちゃえばいいと思うよ。

クリアしたこと、苦勞してやったことが、ずっと年取って『何だ、こんなもんだったのか』っていうことに、たくさん出会うことがある。だけど、それは一生懸命やってきたからこういうことが見えるようになったんだと思う。

日体大の学生の皆さん、学生時代の今をしっかり頑張っていれば、きっといろいろな道が見えてくると思うよ。『この道もあった、あの道もあった』ってね。何本か見えてきた道の中で一番太い道が見えてきたら、これが我が行く道だって決めればいい。道だって自分で作って選ばなきゃ、そのためには、目の前のことを一生懸命頑張ることだよね」。

筆者は大学1年生の時に池田氏の器械体操の授業を受講している。毎授業の冒頭に池田氏が話してくれた「指導者たるものは」というその姿勢は、未熟であった私たちの心に響いた。器械体操の授業であるにも関わらず、道徳の授業のような教えを受けて、「いつか、こんな指導者になりたい」と胸を熱くして、なぜか何度も涙したものである。

今回、池田敬子先生のインタビューに携わり、改めてその言葉の重みを受け止めることができたこと、先生との再会に心から感謝してインタ

ビューを終えたい。

(受理日：2017年2月24日)

